



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	アーサー・ミー、コドモ、ポピュラー・エデュケーションの価値( fulltext )
Author(s)	大田,信良
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. 1, 69: 71-82
Issue Date	2018-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/148732">http://hdl.handle.net/2309/148732</a>
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

## アーサー・ミー, コドモ, ポピュラー・エデュケーションの価値

大 田 信 良\*

英語学・英米文学・文化研究分野

(2017年8月30日受理)

### 要 旨

ノースクリフ卿ことアルフレッド・ハームズワースのメディア帝国とビッグ・マネーが教育ジャーナリズムの世界や教育産業の分野に投資されて生み出されたものに、『子ども百科事典 (*The Children's Encyclopaedia*)』と『子ども新聞 (*Children's Newspaper*)』があり、そうした教育図書の出版は、当然のことながら、コマーシャルリズムによって特徴づけられるもので、ハームズワースにとっては莫大な利益を生み出すための経済事業であったことはいうまでもない。だが、これら2つの教育図書は、歴史的に画期的なテキストであるだけでなく、英国のポピュラー・エデュケーションの範例となるものでもあった。換言すれば、『子ども百科事典』と『子ども新聞』とは、英国のナショナルな公教育や学校教育とは別の教育の存在様態ややり方の可能性を指し示したものであったとみなすことができる。そして、これら2つのテキストの編集・出版を実際に担ったのが、ハームズワースのもとでたゞし時としてその意向や経営方針に起因する利害・関心と矛盾を孕みながら労働し仕事をおこなったアーサー・ミーという人物であった。ハームズワース同様、独学でたたきあげ、そして、それまでのキャリアにおいて下層中産階級向けの出版・製作にかかわってきたミーが多大な貢献を為した子ども向けのテキスト『子ども百科事典』や『子ども新聞』は、教育について独自のヴィジョンと欲望を抱いたミーの仕事を表すものでもあった。

本論は、アーサー・ミーが構想した、英国のフォーマル・エデュケーションとは別のやり方で新たなタイプの教育を取り上げた。そして、彼の仕事における教育自体の特徴や特性は、はたして、どのようなものであったのか、あらためて、本論において考察された。言い換えれば、20世紀帝国主義期にロンドンのシティともつながるハームズワースのビッグ・マネーとそのメディア帝国の部分としてなされた、アーサー・ミーの仕事は、すなわち、『子ども百科事典』や『子ども新聞』といったミーが編集・出版したテキストが提示する教育は、そのまぎれもなくあからさまな拡張主義やきわめて保守的で「大衆的な」ナショナリズムと裏腹に存在する、ポピュラー・エデュケーションによって、その価値が決定され評価されなければならない。ミーのポピュラー・エデュケーションは、たんに、戦後の福祉国家の時代や冷戦期にナショナルに整備され支配的になるような、とりわけ学校教育や公教育に実現し実践されるようになるフォーマル・エデュケーションとは別のタイプのものでしかなかったというわけではけしてない。むしろ、ミーが教育とメディアの領域において為したさまざまな仕事は、知を学ぶ存在がそのポピュラーなメディアにアクセスすることにより、その存在様態や欲望のかたちにおいて、制度化以前のそして制度化された後もある種のメディアの特異な空間に部分の部分として残滓的または勃興的に存続することになるような、コドモを育成し形成することに、歴史的に、重要な役割をはたしたことに、その価値があった可能性を、本論は論じた。そしてまた、言語あるいは修辞性の観点からすれば、子ども向けの教育とメディアをめぐるアーサー・ミーの仕事に刻印されていたのが、字義通りの意味と

\* 東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座 英語学・英米文学・文化研究分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

比喩的な意味との差異が、さらにまた、フィクションとノンフィクション、文学的なものと科学／非文学的なものとの区別が、比較的安易に単純化されそして安定的に固定化された対立関係によって捉えられ、近代国民国家の枠組みにおける言説・制度のうえで、いまだ完全には区別され価値付けられる以前の全体性の痕跡を保持・残存していた瞬間・契機であったことも、本論は示唆したうえで、教育をその部分として含む文化の問題あるいは20世紀の「文化産業」の問題についても論評を加えた。

キーワード：アーサー・ミー、コドモ、ポピュラー・エデュケーション

## 1. アーサー・ミーとはだれか？

ノースクリフ卿ことアルフレッド・ハームズワースが、1870年のフォスター教育法により開始された公教育としての初等教育の拡張の動きと合致・協調するというよりはむしろ併行しながら、90年代後半にはコマースリズムにもとづく日刊の大衆紙を出現させることにより英国ジャーナリズムの世界にいわゆる「ノースクリフ革命」を引き起こしたことはよく知られているが、その牙城となった巨大な出版社アマルガメイティッド・プレスがその子会社として教育書籍出版 (the Educational Book Company, EBC) をもっていたことやハームズワースと教育産業との関係性については、意外に知られていない、あるいは、十分な議論の対象となっていないといえるかもしれない。

たしかに、彼が80年代の大衆週刊誌ニューズズの『ティット・ビッツ』に対抗するために『アンサーズ』を編集・出版するだけでなく、1896年により大衆的で廉価な——従来の日刊新聞の半額である半ペニー——『デイリー・メール』紙を発刊して大成功をおさめ、やがて英国の出版界をある時期に牛耳るようなメディア帝国を打ち立てたことは有名だ。ここから、よくもわるくも、ハームズワースの名前は、大英帝国における大衆あるいは労働者階級のジンゴイズムや帝国列強を揶揄する狂信的な愛国主義、そして、ボーア戦争の戦地報道と結び付けられて、これまで議論されてくることになったのかもしれない。

だがまた、自身がたいした公教育を受けず学歴もないが独学で成り上がったセルフ・メイド・マン、独立独歩のたたきあげのメディア王としてのイメージをもつハームズワースは、消費文化の展開・転回や都市化の進行にともない急速に増大しはじめた、事務員／オフィス・ボーイたちや小売小店主／ショップ・オーナーたちなど、下層中産階級を讀者とした、教育図書・自学自習書・啓蒙書をぞくぞくと出版し、また、それにより大きな利益を得ていた。その意味で、「ノースクリフ革命」とりわけその教育産業における出版事業は、19世紀半ばの『カッセルのポピュラー・エデュケーター』の系譜に位置付けられるかもしれない。実際、『ハームズワースのセルフ・エデュケーター』、や『世界のグレート・ブックスを要約で』といった教育図書は、『ハームズワースの世界各国の歴史』のような万国の古今にわたる歴史を語るテキストとともに、その系譜的つながりを示している<sup>1</sup>。

ジリアン・エイヴリの先駆的な研究が論じるように、このハームズワースのメディア帝国とビッグ・マネーが教育ジャーナリズムの世界や教育産業の分野に投資されて生み出されたのが、『子ども百科事典 (*The Children's Encyclopaedia*)』や『子ども新聞 (*Children's Newspaper*)』という歴史的に画期的なテキストであり、と同時に、これら2つの教育図書は英国のポピュラー・エデュケーションの範例となるものであった (Avery)<sup>2</sup>。換言すれば、『子ども百科事典』と『子ども新聞』とは、英国のナショナルな公教育や学校教育とは別の教育の存在様態ややり方の可能性を指し示したものであったとみなすことができる。そうした教育図書の出版は、当然のことながら、コマースリズムによって特徴づけられるものであり、ハームズワースにとっては莫大な利益を生み出すための経済事業であったことはいうまでもない。だが、これら2つのテキストの編集・出版を実際に担ったのは、ハームズワースのもとでただし時としてその意向や経営方針に起因する利害・関心と矛盾を孕みながら労働し仕事をおこなったアーサー・ミーという人物であった (Avery 229-34)。ハームズワース同様、独学でたたきあげ、そして、それまでのキャリアにおいて下層中産階級向けの出版・製作にかかわってきたミーが多大な貢献を為して生産・流通・消費の過程が拡大再生産された子ども向けのテキスト『子ども百科事典』と『子ども新聞』は、教育について独自のヴィジョンと欲望を抱いたミーの仕事を表すものでもあった。

アーサー・ミーは、英国のフォーマル・エデュケーションとは別のやり方で新たなタイプの教育を構想したということだ。彼の仕事における教育自体の特徴や特性は、はたして、どのようなものであったのだろうか、あらためて、本論で考察してみたいと思う。言い換えれば、『子ども百科事典』や『子ども新聞』といったミーが編集・出版したテキストが提示する教育は、いったい、どのような読解や読むことを試みることにより、その価値が評価されるのか、あるいはまた、そうしたテキストの読みや解釈は、どのような歴史的な意味を探ることになるのか、本論が論じようとするのはこの問題だ。

## 2. ミーの『子ども百科事典』

最終的に8巻からなる『子ども百科事典』は、子会社である教育書籍出版が各巻ごとの販売を開始するのとはほぼ同時に、もともとは、1908年から1910年にかけて7ペンスの値段で隔週刊という形態で、アマルガメイティッド・プレスから、出版された。この子ども向け教育図書は、通常理解されているような百科事典として完成するようなものではなく、子どもが読み物として読む本を集めたものであり、恣意的に「グループ」分けされたうえで部分ごとに出版するように編集されているところに、その特徴がある。このような特徴的な編集・製作・出版のねらいは、当時の子どもたちに提供する本が、なによりも、役に立つ科学的で実用的な知識をいつまでも終わることのないエンターテインメントと一緒に、両方同時に合わせて、しかも、贅沢にそしてわくわくするように、送り届けるところにあった。具体的には、各巻は、それぞれ、以下のような19の異なる「グループ」とよばれる大項目で、構成されている。

- ① Earth and its Neighbours: the story of the boundless universe and all its wondrous worlds
- ② Men and Women: the story of immortal folk whose work will never die
- ③ Stories,
- ④ Animal Life,
- ⑤ History,
- ⑥ Familiar Things: the story of the things we see about us every day
- ⑦ Wonder: plain answers to the questions of the children of the world.
- ⑧ Art,
- ⑨ Ourselves: the wonderful house we live in, and our place in the world
- ⑩ Plant Life,
- ⑪ Countries,
- ⑫ Picture Atlas,
- ⑬ Poetry and Nursery Rhymes
- ⑭ Power: the story of where power comes from, what it does, and how it works
- ⑮ Literature,
- ⑯ Ideas,
- ⑰ The Bible,
- ⑱ Things to Make and Do, and
- ⑲ School Lessons: simple learning made easy for very little people, which gave kindergarten instruction in reading, writing, arithmetic, music, drawing and French

このような構成から明らかなように、『子ども百科事典』は、いわゆる主観を排して中立性を保つことによって得られる客観的事実を、機械的にそして無味乾燥なまでに厳密に、アルファベット順に並べたものではない、ということである。この教育テキストに提示されるのは、子どもひとりひとりの精神に働きかけてそこに自然と生まれるワンダー＝驚異の感覚を呼び覚ますような、きわめてシンプルに子どもにも理解しやすいように体系化された「普遍的知」にほかならない。最後の19番目のグループ“School Lessons”は、初等教育を受ける前の子ども・幼児にあたえられるべき準備段階のレッスンをあつかっており、読み書き・算数ならびに音

楽・図画のほかに、外国語教育としてフランス語を学ぶことになっている。19世紀のヴィクトリア朝の子どもたちが学んだ『カッセルのポピュラー・エデュケーター』の場合、英文法、フランス語そしてラテン語が学ばれたのだが、さすがに、これらの科目は当時においては場違いなものとなってグループあるいは大項目から抜け落ちて、会話を中心としたフランス語だけが残ったということか (Avery 237)。

このような『子ども百科事典』は英国国内で人気を博しただけでなく、世界中で売れに売れた。フランス語やスペイン語のエディションもあれば、中国語やアラビア語に翻訳もされたい。なかでも、『ブリタニカ百科事典』の版權を、ホレス・フーパーとともに、買収したウォルター・ジャクソンは、1910年に『知識の本 (*The Book of Knowledge*)』としてアメリカ版を出版・販売したし、このときにはすでにフーパーとのパートナーシップを解消した彼は、子ども向けのをはじめとしてその後さまざまな百科事典を、自らが創設したクーリエ社から売り出すことになる。ちなみに、日本の大正時代における新教育運動が進展するなかで成城尋常小学校を創設したり、また文部官僚や大学の学長を歴任したりした沢柳政太郎が、1927年の世界教育視察のときにみつけ、後に玉川学園を創立する小原國芳にその海外視察の土産品として贈与したのが、『子ども百科事典』の米国版である『知識の本』だったらしい。

21世紀の現在においても、『子ども百科事典』あるいはそのグローバルな翻訳・再生産である『知識の本』は存続しているようであり、*Parents' and Teachers' Guide to Reading Courses: The Book of Knowledge, The Children's Encyclopaedia* といういささか奇妙なタイトルの本が存在している。グロリエ社のもとになったグロリエ・ソサエティが出版元でニューヨークにおいて1917年に出版されたのがもともとのかたらしいが、現在実際にわれわれが手にするのは、たとえば、世界中のオンデマンド出版を大規模に引き受けるビジネス・モデルを実践している1例らしいS N Books Worldが印刷・製本——印刷・製本の実際の作業はインドでなされたという記載がある——をしたテキストである。学校で公教育をおこなう教師のみならず家庭での子どもの学びをガイドする両親のために、『子ども百科事典』・『知識の本』からのいくつかのグループあるいは大項目の抜粋——History / Fine Arts / Nature Study / Science / Language and Writing / Religion / Mythology / Engineering / Great Industries / Implements of Modern Warfare / Electricity / Boats and Boat-Building / Travel / Adventure and Exploration / Farming / Aviation / School Lessons / Present Day Topics——がある。

さらに、それと合冊されたかたちで、Ella Frances Lynch, *Five Minute Lessons for the Home* が付加されている。この付録のようなランチのテキストの内容をみると、学校ではなく家庭あるいは家の空間に拡張された戸外において学ぶことも想定したものであることがわかる。Introductionに続いて、Morning Lessons, Evening Lessons, あるいは、The Kitchen and Dining-Roomといった章があり、ほかに、Indoor Lessons (Dusting, Measuring, Weighing) と対照される Out-of-Door Lessons (The Dog, The Birds / The Spider, The Mosquito / The House-fly, The Ants, The Flowers / Minerals, The First Steps in Natural History) もあるのが興味深い。そして、最後の章をなすのがThe Nurseryであり、数を数えることを学ぶNumbers, 読み書きに必要なABCの知識を覚えるThe Alphabetのレッスンが示されたあとで、いよいよ、ナーサリー・ライム——The Mother Goose Rhymes——や寓話——Aesop's Fables——、そして、簡単で短いいくつかの歌を実際に口と体を動かして楽しむLullabies, Ditties, Roundelays, and other Simple Songs のレッスンが取り上げられて、母親が家庭で小さな子どもに適切に学ばせるためのガイド・注意があたえられる。要するに、*Parents' and Teachers' Guide to Reading Courses: The Book of Knowledge, The Children's Encyclopaedia*が志向するものも、英国におけるポピュラー・エデュケーションの範例であるミーの『子ども百科事典』の生産とそのさまざまな再生産の場合と同じように、「教えかつ楽しませる」というヨーロッパ古来のきわめて伝統的な理念を遂行しようとしたものであり——家庭で先生の代わりに教えるのが父親ではなく母親であるのも「伝統的」といってもはたしていいだろうか——、本書のタイトルが端的に示すように、客観的事実の羅列をもとにひょっとしたら断片的なままに終わる情報を引き出すというよりは、あくまで、読むことを大切に「リーディング・コース」のガイドとして編集・出版されているのがわかる。

### 3. コドモのためのポピュラー・エデュケーション

このような大英帝国におけるポピュラー・エデュケーションの重要な部分を構成し編制したのが、アーサー・ミーの仕事であった。つまり、その仕事にみられる教育は、フォーマル・エデュケーションあるいは狭



義の学校教育や公教育空間とはまた別のタイプの教育にかかわるものであった。そしてまた、彼の出版・編集の労働が巨大な規模できわめてポピュラーであったこと、ならびに、その後も長年にわたって支持されたひとつの理由は、エイヴリの論文も示唆するように、『子ども百科事典』の記載事項の多くをリサイクルして、ほかのいろいろなテキスト、なかでも、『子ども新聞』に何度も再登場させるといった出版の手法・形式にもとめられるかもしれない。このような再生産あるいはリサイクルのもうひとつ別の例をあげるなら、英国のさまざまなローカルな地域や州について「国王の英国」というテーマのもと熱い筆致で記述したシリーズものが、そうした出版手法がうまくいった例としてあげることができるかもしれない<sup>3</sup>。なにしろ、大英帝国の統合の象徴あるいは「英国らしさ」・「帝国意識」を表象するそのような主題・テーマは、「普遍的に訴える魅力」をもっており、子どもたちだけでなく多くの大人の読者も購入し読み耽ったということか。

すでに言及した『子ども百科事典』がごくシンプルに子どもたちに供給する「普遍的知」の体系とそこで経験されるワンダー＝驚異の感覚は、「国王の英国」シリーズが主題化する英国の帝国主義の「普遍的に訴える魅力」と不可分のものであった、といえるかもしれない。だが、ミーが編纂・出版したポピュラー・エデュケーションのテキストの代表例は、少なくともミー本人にとっては、『子ども新聞』を置いてほかにない、そしてまた、エイヴリの主張にしたがうなら、そこに主題化され表現されているのも、大英帝国への確信に満ちた揺らぎなき信仰、田園としての田舎・地方への愛、そして、モダンな発明・テクノロジーに対する熱情だった (Avery 239)。

ミーの仕事は、20世紀帝国主義期のあらたな「大衆」レヴェルでもみられたあからさまな拡張主義やきわめて保守的なナショナリズムと裏腹に存在する、ポピュラー・エデュケーションを(再)表象するものであったのかもしれない。なにしろ、『子ども新聞』は、その主たる起源を子どもたちをわくわくさせるワンダーに満ちあふれた帝国主義の知を生産した『子ども百科事典』にもっていたのだから。それは、『子ども百科事典』は、事典本体とは別に、1910年以降、付属の月刊の定期刊行物を売り出していたことにかかわる。タイトルはいろいろ変わったが最終的に1933年まで続いて終刊したこの月刊誌のいわば妹分としてできたのが『子ども新聞』、世界で最も愛読された月刊誌の週刊誌版であった。もっとも、『リトル・ペーパー』というのが実はすでに『子ども新聞』に先行して存在していた。これは、『子ども百科事典』のおまけ・付録としてデザインされたちっちゃなおもちゃや冊子と8ページからなるミニチュア版新聞からなる「ワンダー・ボックス」というものがあつたのだが、そのボックスを構成するいくつかの要素から、おもちゃや冊子を除いて部分的に独立させたものであった。『リトル・ペーパー』は1910年にその刊行を始めてすぐに廃刊することになるが、ほぼ8年の時を経て1919年3月に創刊されたのが、『子ども新聞』であった。出版は、親会社のアマルガメイティッド・プレスが1912年にファリントン・ストリートに移り複数の部署をかかえたフリートウェイ・ハウスからで、値段は1.5ペニーだった。

世界に進行する急激な変化に対応して人生を生きていくうえで、若さは、祝福すべき意味のあるものだ、そして、同じく若さに特徴づけられたこのちっちゃな新聞は「いまだかつて夢みられたことのないワンダーの物語」を視覚的に見せ語るためにこの世界に出現した、と『子ども新聞』は謳う。読者としての子どもとポピュラー・エデュケーションのメディアとしての大人用ではない新聞との関係を、たとえば、“Father Can Understand It Now” というタイトルの4コマ漫画では、次のように提示している。

In the days when there were only grown-up newspapers children would yawn and listen while Father tried to explain what he half understood the Daily Dope to mean.

Now the children entertain their parents by making it all clear. (*Children's Newspaper* 21 Mar. 1919. 7)

「かつては (As It Used To Be)」と「いまでは (As It Is Now)」が対比され、大人向け新聞だけしかなかったときには、子どもたちは、お父さんが“The Daily Dope”という大衆の麻薬のような扇情的タブロイド新聞を生半可な理解をもって家族の息子や娘に説明しているあいだずっと、あくびをしながら聞いていたのだが、『子ども新聞』が英国社会に存在するようになったいまでは、すっかり変化した光景を視覚的にも提示することにより、親子あるいは大人と子どものこれまでは自然で規範とされた立場が逆転してしまったことを「いまお父さんはわかる」というユーモアたっぷりのタイトルで伝える記事だ。その内容をきわめて明確に理解した両親

たちに説明する子どもたちは、その意味で、これまでの大人の下に従属しそれをモデルとして成長・人間形成をすることが想定された存在とは異なる、新たなタイプの子どもたちすなわちコドモである、と解釈しなければならぬ。

もっとも、このコドモという存在が帰属した「居場所」を見出す空間は、英国国内あるいは植民地を含む大英帝国といった場所だけではないのかもしれない。“Father Can Understand It Now”という漫画記事と同じページのすぐ上中央に掲載されているのが、“Who Won the War? I, Said the Kinema”であり、米国参戦とその援助が期待される前のドイツ軍に追い詰められたフランスの状況において、映画という文化メディアが商業的に楽しませるだけでなく国民を動員するための教育機能をさまざまにはたしていたことを——“The kinematograph entertains and instructs in a thousand ways, but one of its enthusiasts holds that it actually won the war!” (*Children's Newspaper* 21 Mar. 1919. 7)——、コドモのために、簡潔かつ平明に記述した記事となっている。

Now came the kinema to the rescue! Before the American armies could reach France, the films arrived, millions of feet of them, telling the story of the deliverance that was on the way....France saw all this on the films, and she saw in it contradiction of every vicious argument that was told to discourage her....“That,” says our American friend, “is how the kinema saved the world!” (*Children's Newspaper* 21 Mar. 1919. 7)

英仏露の協商諸国側に立って参戦した米国とその軍隊がフランスに到達するよりも前に、米国の映画がフランス国民の救援部隊として到着したのであり、間近に迫った解放の物語が、すでに語られていた。また、ドイツのクルップ社のような軍需産業や動員された労働者たちの状況も映像で見ることによりドイツ側に降伏するよう誘導するプロパガンダに対抗することができた。友人としてのアメリカの立場からするならば、これこそ映画が世界を救ったという格好の例だ、ということになる。ここでコドモが体験するワンダーはヨーロッパの戦争の行方にかかわるもので、もちろん大英帝国の命運にもかかわる知が問題となっているのだが、ここでコドモが学ぶのはモダンな戦争における軍事・政治のパワーだけでなく映画のようなテクノロジーがはたす重要な意味・機能である。そして、この新たな戦争形態に対応するようになされたイノベーションを通じて世界に登場したモダンなテクノロジーは、英国と同盟を結ぶことになる米国由来のものであった。

言い換えるならば、大英帝国とそこにコドモとして生きる意味を理解することは、英米関係をまずは理解することにほかならず、そしてまた、そのように自らの存在や帰属の問題を捉え直すことが20世紀の戦争なき平和な世界の秩序、たとえば、国際連盟の構想を学ぶことに通じている。ちなみに、1919年3月22日の『子ども新聞』の巻頭ページを飾る記事のひとつは、“What the Conference Has Forgotten”であった。第1次大戦終結後、パリ講和条約で米国のウィルソン大統領の提案のもと国際連盟が誕生することになったことが、まず提示される。それでは、この記事のタイトルが示すパリ講和会議が忘れていないこととはなにか。

But one other thing is as true as the sun in heaven—that nothing on earth can save the League of Nations unless the children are on its side. What is Paris doing to enlist the children? (*Children's Newspaper* 22 Mar. 1919. 1)

第1次大戦中にドイツへの降伏に追い込まれたフランスの状況を救ったのが米国の映画であったのと同じように、誕生間近の、あるいは、提案者の米国は議会の同意を得られず参加しないことになりその後ほどなく機能不全に陥り結局は崩壊することになる国際連盟を救うことになるのは、『子ども新聞』の読者であるコドモである。この事実をパリ講和会議は忘れていないのではないのか、というのがタイトルの意味するところであった。

国際連盟を提案した米国のウィルソンとメディア・テクノロジーについては、1919年3月21日の紙面でも、“Mr. Wilson and the Wonderful Lamp”という記事が取り上げている。この記事のタイトル後半“the Wonderful Lamp”つまり「ワンダーに満ちあふれたランプ」が指示するのは、世界を一体にするテクノロジーとしての電話にほかならない。ロンドンでは、フレミング教授がごくありふれた電球をもとにワイヤレスの電話というものをつくったか、その「ワンダーを引き起こす実験 (“wonder-working experiments”）」を為したかについて説明したことが述べられる。と同時に、この電話を使って、帰国の途上の船上から、ウィルソンはアメリカ国

民に向けて国際連盟の話を伝える、そして、アメリカ国民は大西洋を横断してその驚異の声を通じたメッセージに耳を傾けることになる、と記事は伝えている (*Children's Newspaper* 21 Mar. 1919. 7)。ただし、英米関係と電話というメディア・テクノロジーの関係を第1次大戦後の大英帝国や平和な世界秩序というコンテキストにおいて捉えるときに、注意すべき点があることを、1919年4月5日の巻頭記事が伝えている。2年前の1917年突然大西洋を渡って人間の声が届き、米国のニューヨークで発せられた音声フランスのパリで聴取されたのだが、なんと、パリからの返信がニューヨークで受け取られることはなかった。なぜなら、ヨーロッパには人間の声を発信するテレコミュニケーションのテクノロジーがまだ装備されていなかったからだ (*Children's Newspaper* 5 Apr. 1919. 1)。このことを、巻頭記事“Marconi Beats the Aeroplane”を提示するのだが、この記事を読むコドモが学ぶべき点はなにか。

“Marconi Beats the Aeroplane”が語るわくわくさせるワンダーの物語とは、昔とは違って、飛行機とりわけ戦闘機の価値よりもグローバルにビジネスを展開・転回する英国の電信電話会社マルコーニ社のテレコミュニケーションの価値のほうが、いまでは重要になってきたというストーリーだ、換言すれば、電話という情報テクノロジーと戦闘機という軍事テクノロジーとの競争——“the telephone has raced the aeroplane” (*Children's Newspaper* 5 Apr. 1919. 1)——において前者のほうが重要なのだ、という驚異の事実を含む人類あるいは文明世界の歴史物語だ。『子ども百科事典』から派生したものでありながらミーの構想した教育のヴィジョンと欲望にとってはもっとも満足のいくものであった『子ども新聞』編集・出版は、そのポピュラーな流通や巨大なマーケットにおける消費という点だけでなく、国際連盟を通じたグローバルなそして平和で安定した世界秩序の構築と実現に向けて英米のさまざまなレベルにおけるトランスアトランティックな絆とそれにもとづく協調・協働を力強く信じた仕事であった。ミーの仕事は、英国のポピュラー・エデュケーションを範例的に提示したものであったが、このようなりべらるな志向性や可能性もまた表象されていたことにも、われわれの解釈は注目しなければならない。

ロンドンのシティともつながるハームズワースのビッグ・マネーとそのメディア帝国の部分としてアーサー・ミーが成し遂げた教育・文化事業の生産・再生産は、英国国内だけでなく英語圏の米国や植民地、さらには、日本におけるように翻訳を通じて、世界中で成功し売れもした。とりわけ、『子ども百科事典』からある意味派生的にあるいは追加・補足的に生み出され新たなかたちで再生産されたのが『子ども新聞』であった。たしかに、20世紀帝国主義期になされた、ミーの仕事は、そのまぎれもなくあからさまな拡張主義やきわめて保守的で「大衆的な」ナショナリズムと裏腹に存在する、ポピュラー・エデュケーションの範例であった、といえるかもしれない。だがそれと同時に、英国のポピュラー・エデュケーションの範例としての『子ども百科事典』・『子ども新聞』を解釈するうえで、ミーの労働によるこのような編集・出版のポピュラーな流通を誇りかつまたさまざまに巨大なマーケットにおいて消費されたコドモ向けの教材・テキストは、英国が米国との間に構築したトランスアトランティックな絆やつながりやさらにまた国際連盟を通じたグローバルな広がりにかかれたものであったことも注意すべきである<sup>4</sup>。

#### 4. 『子ども新聞』のポピュラリティと価値の問題

アーサー・ミーの『子ども新聞』が獲得したポピュラリティとその長年にわたる支持は謎である、とエイヴリの論文の最後のパラグラフで、きわめて示唆的かつまた意味ありげに、述べている。たしかに、『子ども百科事典』はミーの仕事を代表するものであり、その出版に心血を注いだものであった。とはいっても、彼の人生でほかのなによりもましてその欲望の実現によって満足感を得ることができたのは、『子ども新聞』を創刊したという行為であり、定期的に教育と学びを求める子どもたちの間に流通した教育メディアとそのメディア空間においてノンフィクションのニュースという形式で文化生産されたテキストは、ミー自身が自らの記念碑としたいものにほかならなかったらしい。とはいっても、1960年代半ばには、このポピュラーな『子ども新聞』の姿も、ずいぶんと、様変わりしてしまった。廃刊される1965年の5月の頃には、紙面のフォーマットがきわめて貧弱になってしまっており、そこには情報とよべるようなものほとんどなければ記事の量も激減しており、代わりに写真だけが無意味に増加していた。『子ども新聞』は、いまや、ポピュラー・ソングを歌うアイドル歌手やサッカーのスター選手をフィーチャーするような、完全に俗受けするものになり果



ててしまっており、子どもたちが英国社会で立派な大人として通用し成功を獲得できるように啓蒙・教育するというきわめて崇高で宗教的でした使命を打ち捨ててしまっている感があるようになった。もちろん、同じような変容をしかもずっと前に試みた例として、たとえば、カッセルの『少年少女向けピクチャー新聞』がある。1923年にスタートしたこの子ども向け新聞は、記事として取り上げている内容は『子ども新聞』と大きな違いはないが、写真の使用はむしろ多かったのだが、それでも、1年ぐらしか続かず、63号で廃刊となっている。たしかに、『少年少女向けピクチャー新聞』の失敗に比べてみるならば、時代や状況の推移にとまなうマーケットや需要の変化にもかかわらず、ミーの出版事業のほうは、貧弱なものに様変わりしてしまったとはいえずいふんと命脈を保ったことになる、その理由はますます謎であり秘密めくことになるのだが。

だが、そもそも、『子ども新聞』といったものをそれまで熱狂的に支持した読者とは誰だったのか、そのような読者はいったい歴史的にどのように存在していたのだろうか。言い換えれば、そもそもこの教育・文化テキストの読者として想定されたコドモあるいは子どもたちは、どのような読書の経験・体験をしたのだろうか。実のところ、1930年・40年代に子ども向けに出版されたが——エイヴリ自身が、そのように読者として想定された子どものひとりであった——、当時の子どもの反応といえば、大体のところほぼ一致して、退屈したという。子どもたちの大半は、まだかろうじて『子ども百科事典』の愛読者ではあったとしても、自分たちに向けて作られた新聞に掲載されたようなノンフィクションの論説文をわくわくしながら楽しんで読んだわけではなかった。わざわざニュースに関心をもって熟読したりすることもなければ、自然の不思議や科学やテクノロジーのイノベーションの記述に心を躍らせてたりもしなかった、ましてや子ども用に作られたジョークなど問題外だった。子どもたちが、その頃、学校や家庭の規範的でパブリックな教育空間そのものというよりはそれと接する外部すれすれの周縁で、心から強く熱く求めていたのは、物語性をふんだんに備えた別のタイプと存在様態のフィクション——公教育や学校教育の空間でキャンオンとして教えられるようになった教養小説やそのポピュラー版？——にはほかならなかったのかもしれない (Avery 242)。

『子ども新聞』は、子どもたちの観点からするなら、けして熱烈に愛されていたわけでも熱中して読まれていたわけでもなかった、というのも、テキストの内容・形式に関する狭義の構成のやり方や販売・流通を含むデザインが、なによりもまず、子どもたちではなく、世俗的な成功や上昇志向の強い親たちをターゲットとしたものであったからだ。階級上昇を熱望し英国社会の階級構造に包摂されることを自ら志向したようにみえる親たちは、自分たちが産み育てた子息たちが上流階級への仲間入りのパスポートとなるパブリック・スクールの価値観を身につけてほしいと熱く思っていたのであり、この裕福で人脈・社会資本、等々にも恵まれた子弟たちが教育を受ける私立学校につながる価値観こそ、アーサー・ミーが『子ども新聞』のテキストによって表現しようとしたものにほかならなかった。

このように、ハームズワースが手がけた元々の定期刊行物とは違って、『子ども新聞』は、明確に比較的高額所得者向けの出版物として生産された、啓蒙的・教育的な企画であったのだ。オクスブリッジへの道につながるパブリック・スクールの教育空間は、パブリックとはいってもけして福祉国家的な公立あるいは国立の言説・制度によって編制されたものとは異なっていた。ミーの『子ども新聞』に掲載されたのは、まずもって、旧来の教養小説や立身出世の物語の系譜にある、あるいはより適切には、それらの物語をより大衆的に、ポピュラーに更新したようなものであった。すなわち、それは、パブリック・スクールの生徒やポニーの背にまたがる少女の写真であり、スポーツ欄は、クリケット、オクスフォード大学とケンブリッジ大学対抗のボートレース、ウィンブルドンのテニス競技にかぎられていた。音楽についていえば、ポーランドやウクライナのピアニストのリサイタルや古楽復活の先駆者らのコンサートのレビューなどが掲載されていた。また、購入する親たちにしても、本心を言えば、子どもたちの関心を俗悪で低級と否定されたコミックから逸らすことができればそれで十分というくらいにしか、考えていなかったのかもしれない (Avery 242)。このようなもうひとつ別のあるいは実質的な「読者」であった親たちの観点からするなら、『子ども新聞』のポピュラリティをめぐる謎を解くヒントのひとつは、上層階級にあこがれそこに居場所を見出すことを欲望する下層中産階級の親たちが歴史的なインデックスとなるような、戦間期の階級再編とミーが手がけた子ども向けの教育教材としての新聞の生産にみられるような、メディア企業による教育空間の市場原理による商業化・教育自体の商品化、これら2つの力や動きの間に出来た歴史的な同調や協調に、ひょっとしたら、あるのかもしれない<sup>5</sup>。

さてそれでは、これまでとは逆のやり方で次のような問いをたててみたらどうだろうか、親たちはいつどの

ようにしてアーサー・ミーの提供・供給するポピュラー・エデュケーションを熱烈に支持しなくなってしまったのか、『子ども新聞』のポピュラリティは、歴史的に、どのような過程やコンテキストにおいて消滅してしまったのか、と。別の言い方をすれば、メディア企業による教育ならびに文化の商業化や産業化の力や動きと矛盾を孕みながら対立しそれにとって代わるような「教育の国営化」あるいは近代国民国家としての英国による教育の制度化という歴史的物語を思考・想像したうえで、われわれは、どのような目印に注目し解釈の対象とすべきなのか。

こうした問いに取り組むうえで、きわめて興味深い歴史的時点が存在していることを、まずは、確認しておこう。それは、1949年までに姿をあらわしはじめた『オクスフォード・ジュニア百科事典』の存在である。ローラ・ソルトとロバート・シンクレア編集によるこのアカデミックな事典テキストは、もはや時代遅れで合わなくなったミーの子ども向け百科事典を矯正するものとしてオクスフォード大学出版局という制度とその権威にもとづいて出版され、『子ども百科事典』にとって代わった、とエイヴリの論文が言及している(Avery 239)。『オクスフォード・ジュニア百科事典』は、きわめてアカデミックなものを志向した。端的な相違がみられるのは、後者の『オクスフォード・ジュニア百科事典』のテキストは相対的に客観的事実の記述によって構成されている点だ。個々の事項や記述の執筆は各分野それぞれの専門家に委託されたものであった。

オクスフォード版の子ども向け百科事典の学術性は、個人の主観や視点を表現することを抑えた厳格なまでに冷静な態度によって保証され、また、新たな読者たちによって好評のうちにあたたかく受容されたのに対して、ミーのテキストが時代遅れになったとみなされたのは、あるいは、人気を失い支持されなくなっていくことになったのはどうしてだったのか。ポピュラーな編集者・出版者として仕事をしたミーは、いわゆるフォーマル・エデュケーションにはほとんど敬意を示すことなく、彼自身の人道主義やテクノロジーの発展に対する興奮から発して、人類の進歩と改良というミッションを遂行することをめざした。ひたすら世界中の多種多様なワンダーや不思議の発見の喜びを伝えることにより、コドモの好奇心と関心を引き覚ますこと、これこそを目的にしていた。ミーの『子ども百科事典』の最終巻にはいちおう索引がつけられているが、コドモ向けに生産されたこの教育テキスト全体は、索引をたよりにたんなるリファレンス本として使用するものではなく、読むことをあくまで志向したものであった。たとえば、リーディング用の教材として、英国あるいは大英帝国を担う人材を育成するのに必要とされる、知をもたらしたり啓蒙したりすることができたようなものだった。ミーのテキストが供給する知は、ナショナルで公的な学校制度における教育を通じて学習される、いわゆる役に立たない知識とは別物であった、ということになるのだろうか。とはいえ、ポピュラー・エデュケーションとしての意味・機能を作動させた『子ども百科事典』のこのような特性・特異性が、カッセルの『少年少女向けピクチャー新聞』が創刊されると同時に失敗に終わった1920年代に、すでに、大部分失われていたという<sup>6</sup>。2世代にわたる子どもたちを啓蒙しそしてまた来るべき世代の人材育成のためにもそのような機能や意味をもつことになるどころか、ミーの仕事やその手法は、第2次大戦中にすでに時代遅れになり始めており、戦後の冷戦期に入る頃に、ポピュラー・エデュケーションとしての意味や価値を、そのポピュラリティとともに、失うこととなった。

歴史的には、この時点で、『子ども新聞』というメディア空間において知を受容・消費する学び手たちと独特な教育を供給するミーとの間の生産が、もはや拡大しつつ反復されることが途絶した、ということになる、もっとも、その途絶や中断は、英国国家による教育の制度化の後の時代においても、ある種のメディアの特異な空間に部分の部分として存続する可能性を完全に否定するものではないのではあるが。そして、実際には『子ども百科事典』は、改訂されて、1953年と1964年に再版されたりもしたもののそのときにはすでにミーの盛期はほぼ完全に終わっていたのであり、ポピュラー・エデュケーションがナショナルだけでなくグローバルやローカルに価値をもち機能し続けることができた特異なメディア空間のエンクレーブをわれわれは別のやり方で別のところに見出さなければならないかもしれない。そうした時期こそ、英国における教育のナショナルな制度化以降の幼児や児童が登場し、それまで支配的であったかみえた教育産業・文化産業をも、残滓的なあるいは勃興的なものに変化させたのかもしれない。

ここまで『子ども新聞』あるいはその「起源」である『子ども百科事典』のポピュラリティの謎を読み解くために作者と読者それぞれの観点からさまざまに考察してきたが、最後に、この教育・文化テキストについてその言語に注目して議論をまとめた。アーサー・ミーの仕事の重要な部分をしめその再生産・派生的に差異

をともなう反復によって『子ども新聞』を生み出したこの事典が、各分野の専門家が中立的な立場で記述したいわゆる客観的事実を参照するのではなく——アルファベット順の単語や関連語を引いて知識を断片的にそして無批判に得る、あるいは、現代なら頻出語を検索して遭遇した情報を確認・保存して事足りるのではなく——、読むことあるいは知と喜びが分断されないリーディングの行為そのものをあくまで志向したものであったこと、このことについてはすでに確認した。言語あるいは修辞性の観点からすれば、子ども向けの教育とメディアをめぐるミーの文化的生産が歴史的に生み出したポピュラー・エデュケーションには、虚構の物語と事実に基づく客観的記述をハイブリッドに区別や価値付けをすることなく混淆させて物語る瞬間が、あるいは、テキストの全体性においてフィクションとノンフィクションとの区別がなされると同時にそれらの区別をいわば括弧に入れ廃棄してしまうような契機が刻印されていたのを、われわれは、読み取ることができる。

ミーが生産するポピュラー・エデュケーションのテキストにおけるこのような瞬間・契機とは、字義通りの意味と比喩的な意味との差異が、比較的安易に単純化されることにより安定的に固定化された区別や対立が確定されるというよりは、異質な2つの種類の言語と意味の差異やその差異が構成するはずの全体性が、そのほとんど触知されえない痕跡を残す以外に、消去されようとするまさに歴史性をその現在という時間性において指し示すものであった。このような歴史性は、ひょっとしたら、やがてこの後に、このテキストを構造化するフィクションとノンフィクションの区別やその区別にもとづく価値付けの問題が、英国のナショナルな教育・文化の言説・制度において、そしてさらに、冷戦という実のところ比較的安定したシステムでもあった国際関係あるいは地政学的編制において「解決」されたことになったのかもしれない。

## 5. 文化の問題と教育を再考するために

20世紀帝国主義期にロンドンのシティともつながるハームズワースのビッグ・マネーとそのメディア帝国の部分としてなされた、アーサー・ミーの仕事は、そのまぎれもなくあからさまな拡張主義やきわめて保守的で「大衆的な」ナショナリズムと裏腹に存在する、ポピュラー・エデュケーションによって、その価値が決定され評価されなければならない。ミーのポピュラー・エデュケーションは、たんに、戦後の福祉国家の時代や冷戦期にナショナルに整備され支配的になるような、とりわけ学校教育や公教育に実現し実践されるようになるフォーマル・エデュケーションとは別のタイプのものでしかなかったというわけではけしてない。言い換えれば、ミーが教育とメディアの領域において為したさまざまな仕事は、知を学ぶ存在に向けられる、と同時に、国際的なりベラリズムをトランスナショナルまたはグローバルに流通させたかもしれないそのポピュラーなメディアにアクセスすることにより、教育という労働をおこなうミーとその学び手たちとの間の生産が拡大しつつ反復され再生産の過程を編制することにより、その存在様態や欲望のかたちにおいて、英国における教育のナショナルな制度化以降の幼児や児童とは異なる、かつまた、制度化以前のそして制度化された後もある種のメディアの特異な空間に部分の部分として残滓的または勃興的に存続することになるような、コドモの育成・形成に、歴史的に、重要な役割をはたしたことに、その価値があったのではないか。言語あるいは修辞性の観点からすれば、子ども向けの教育とメディアをめぐるアーサー・ミーの仕事またはその労働と文化的生産にわれわれが見出したポピュラー・エデュケーションに刻印されていたのは、字義通りの意味と比喩的な意味との差異が、さらにまた、フィクションとノンフィクション、文学的なものと（日常言語を場合によっては含むような）科学や非文学的なものとの区別が、比較的安易に単純化されそして安定的に固定化された対立関係によって捉えられ、近代国民国家の枠組みにおける言説・制度のうえで、いまだ完全には区別され価値付けられる以前の全体性の痕跡を保持・残存していた瞬間・契機であった。以上のような結論を、われわれはとりあえず提示することができるだろう。

最後に、ここまでの教育についての議論を、さらに、フォーマルなものであれそれとは別のタイプのものであれ教育をその部分として含む文化の問題というコンテキストにおいて、もう1度、まとめ直しておきたい。帝国主義期あるいはその後の戦間期や戦後の冷戦期において、文化にも歴史的変化が起こったとされており、その変化の結果について、通常、ハイ・カルチャー／高踏文化とポピュラー・カルチャー／大衆文化という二項対立——20世紀の終りから21世紀にいたるグローバリゼーションの展開・転回や「大衆性」あるいは「ポピュラーなるもの」の称揚を前景化したポストモダニズムの出現によってその境界や区分・価値付けが突き崩



され無化されたと議論されてきている対立——によって語られることが多い問題について、ここでは、前者のハイ・カルチャーを制度化したモダニズムの文学・文化の擁護者アドルノが、ホルクハイマーとともに提示した「文化産業」についてフレドリック・ジェイムソンが示唆した再解釈を取り上げて再確認の作業をおこないたい。

『啓蒙の弁証法』における「文化産業」というCHAPTERのタイトル自体をあらためて見直してみるならば、アドルノの仕事には文化の概念化の試みがなされていないこと、たとえば故レイモンド・ウィリアムズが後年に発展させたような文化の概念を提示することがなかったということをわれわれは発見することになる。実際そのCHAPTERを読んでみればわかることだが、アドルノの関心はエンターテインメント・ビジネスにあったのであり、文化の領域に関するなんらの理論の構築にも取りかかってなどはいなかったのだ (Jameson 230)。他方、日常生活やあるいは「文化」について現在新たに形成されつつある研究領域とアドルノの思考とりわけ表象と全体性をめぐるテキストは、その可能性において、いまや悪名高きしかしその重要性において決定的な「文化産業」のCHAPTERが主張したいくつかの論点を修正するものとみなすことができるかもしれない (Jameson 241)。こうして、ジェイムソンによれば、21世紀のグローバルな資本主義世界という歴史状況においてよりはっきりした姿をとってあらわれる文化において——この「文化」はアドルノが使った意味よりも広いものであるが——、抽象的なものが、あるいは、資本の諸論理形式が、どのように作用したり影響を与えたりするかといったことを探る仕事は、アドルノの次のようなレッスンに学ぶべきところがある。

For what Adorno teaches us—but also the return, under the postmodern, to the now sealed books of the classics of the modern pantheon, —is that questions of representation become interesting and agonizing, all-important, only when a concept of totality is maintained in place as something more than a mere “regulative idea.” (Jameson 244)

アドルノのあるいはベンヤミンのモダニズム的な「配置 (“constellation”）」は、ジャック・デリダが差延や現前／不在の弁証法的な戯れといった概念・タームの使用を通じて批判的に吟味したレヴィ＝ストロースの全体性における中心が不在の構造概念の場合と同じように、表象それ自体の危機であると同時にそれへのコミットメントという観点から捉え直されるべきものである。そして、このような表象の危機とコミットメントを、興味深いと同時に克服困難でありその分だけきわめて重要な問題として適切に対応するためには、全体性の概念を、たんなる観念論的な「統制概念」としてのみ捉えるだけでは不十分である、ということだ (Jameson 244)。けして還元主義的なやり方ではなく、そうした全体性の不在存在として触知されるものを、たとえば、英国あるいは大英帝国のパワーとロンドンのシティに結びつくビッグ・マネー、そして、そうしたマネーやパワーを媒介・翻訳する非人稱的な制度・ポピュラーな教育・文化メディア、等々の歴史的に具体的な姿をとってあらわれる多種多様な物質的な力に結びつけて、解釈することが、現在のわれわれには、求められているのかもしれない。

## Notes

- 1 「ノースクリフ革命」あるいはそれを部分として含む「静かな社会革命」は、とりあえず、以下のように説明できるかもしれない。新聞・雑誌販売だけではなく食料品の販売や広告会社の革新と興隆、あるいは、消費生活協同組合の組合運動といったいくつかの例にみられた、最新テクノロジーを駆使したフォードイズム的な大量生産・大量消費あるいはチェーン・ストアや企業合同の形成による流通のイノベーションが、失業をまねがれ、「大不況」による輸入品を中心とした物価水準の下落により実質賃金の上昇をもとに「豊かな消費生活」を選択・享受することができた労働者を含む大英帝国の国民・大衆に、生活水準の向上と個人消費の増大、等々、をもたらした、というように。
- 2 そもそも、ハームズワースが子ども向けの百科事典の出版といった教育産業を実際に手がけようと思ったのはどんな歴史的コンテキストにおいてだったのか。興味深いことに、Averyは、この点に関して、以下のように、米国の出版業による英国への侵入・拡大すなわち買収という当時の事件に言及している (Avery 234-35)。必ずしも子ども向けではない『ブリタニカ百科事典 (*the Encyclopaedia Britannica*)』、英国を代表する出版事業のひとつが——ほかの代表的出版事業は、もちろん、『英国人名事典 (*the Dictionary of National Biography*, DNB)』と『オクスフォード英語辞典 (*the Oxford English Dictionary*,



OED)』——、ホレス・フーパーという米国の出版業者とそのパートナー、ウォルター・ジャクソンによって買い取られたのを受けて、はじめは、The Monthly Encyclopedia とよばれる月刊誌を刊行することをハームズワースが思いついたらしい。結局この出版企画は実現せずに終わるが、英国からその所有権が移動した『ブリタニカ百科事典』の代わりとなる、教育・文化テキストを出版する計画は、その後、さまざまな自学自習書の出現となってあらわれる、そして、紆余曲折はあるものの『子ども百科事典』の登場ということになる。

- 3 アーサー・ミーの「英国の夢」を論じた Robson は、「国王の英国」シリーズの価値と 21 世紀現在における受容・消費について以下のように述べている。

...the phrase “King’s England” still brings a glow of recognition to the faces of the most unlikely people. When the last issue of the *Children’s Newspaper* has crumbled to dust in the British Library, and when the *Children’s Encyclopedia* has been pulped out of political correctness (that unfortunate golliwog!) the King’s England series will keep the name of Arthur Mee before the public. ....No-one enjoyed collecting more than Arthur, and one can well imagine this man’s spirit hovering over antiquarian book-shops where enthusiasts seize a shabby copy of Cheshire and beg the bookseller to find them a *Durham*. Collectors can now complete their sets over the internet, or through the facsimile volumes published by The King’s England Press, but the appetite for them shows no signs of abating. (Robson 57)

このシリーズが続々と出版された戦間期は自動車の時代であり、「国王の英国」を旅する観光客たちは、週末の余暇・日曜のレジャーとして遠出や小旅行をするときに車の小物入れに置いておきたいガイド・ブックを望んでいた。そして、彼らが望んでいたテキストは、あまりに学術的で味もそっけない記述やつまらない読み物などではなく、ローカル色豊かで歴史的逸話がふんだんに盛り込まれたものであった (Robson 37-38)。

- 4 英国のリベラリズムあるいは「リベラル・イングランド」の問題をグローバリゼーションや「帝国」との関係性において論じた、大田も参照のこと。
- 5 戦間期英国の階級再編と下層中産階級の階級上昇への欲望あるいはイデオロギーについては、Samuel を参照のこと。同様の問題を、階級とジェンダーやフェミニズムとの交錯や交渉の複雑な関係によって、言い換えれば、“conservative modernity” という概念化によって論じたものに、Light がある。
- 6 “This was largely lost when it was reissued as *The Children’s Treasure-House* in 1926, with the text re-arranged so that each subject had a separate volume” (Avery 238).

## Works Cited

- Avery, Gillian. “Popular Education and Big Money: Mee, Hammerton and Northcliffe.” *Popular Children’s Literature in Britain*. Ed. Julia Briggs, Dennis Butts and M. O. Grenby. Surrey: Ashgate, 2008. 229-43.
- Children’s Newspaper* 21 March 1919.
- Children’s Newspaper* 22 March 1919.
- Grenby, M. O. “Introduction.” *Popular Children’s Literature in Britain*. Ed. Julia Briggs, Dennis Butts and M. O. Grenby. Surrey: Ashgate, 2008. 185-87.
- Jameson, Fredric. *Late Marxism: Adorno, or the Persistence of the Dialectic*. London: Verso, 1990.
- Light, Alison. *Forever England: Femininity, Literature and Conservatism between the Wars*. London: Routledge, 1991.
- Lynch, Ella Frances. *Five Minute Lessons for the Home*. New York: Grolier Society, 1917.
- Mee, Arthur, ed. *The Children’s Encyclopaedia*. 8 vols. London: Amalgamated Press, 1908-10.
- Parents’ and Teachers’ Guide to Reading Courses: The Book of Knowledge, The Children’s Encyclopaedia*. New York: Grolier Society, 1917.
- Robson, Maisie. *Arthur Mee’s Dream of England*. Rotherham: King’s England, 2003.
- Samuel, Raphael. “Middle Class between the Wars.” *New Socialist Jan/Feb* (Part1): 30-36; Jun/Jul (Part 2): 28-32; May/June (Part3): 28-30, 1983.
- 大田信良『帝国の文化とリベラル・イングランド——戦間期イギリスのモダニティ』東京：慶應義塾大学出版会，2010。